

〔I〕次の文章を読んで、問い合わせに答えなさい。なお、字数指定のある問い合わせでは、句読点・記号も字数に数える。

この頃、大学生ばかりでなく、高校生や小中学生と話をすることが多くなりました。大学の総長として大学の経営に取り組むことが本務ですが、これから大学に入つてくる若い世代のことをもつと理解しないと、将来の大学像は描けないなと思つたからです。

そこで、意外な反応がありました。ぼくが「スマホを使つている人は?」と聞くとほぼ全員が手を擧げるのですが、「スマホを捨てたいと思う人は?」と聞くと、結構多くの子どもたちが手を擧げるのです。生まれたときからインターネットがあり、スマホを身近に使つて、ゲームや仲間との会話を楽しんでいるように見える若い世代も、スマホを持て余しつつあるのではないか、と感じたのです。

ぼくはといえば、ガラパゴスと言われる古い携帯電話をいつもカバンの中に入れて持ち歩き、かかってきても音が聞こえない状態になつています。でも、何度か携帯メールを読んで、連絡が必要な場合にはこちらから電話をします。それに、自分が必要なときにはちやつかり携帯電話を使つて連絡しているので、「自分の都合のいいときには電話をしてくるくせに、電話しても出ないなんてずるい」と文句を言われています。(一)、めったなことでは携帯電話の番号を教えないで、たぶん多くの人はぼくが携帯電話をもつていないと思つています。でも、オフィシャルなメールアドレスは伝えてあるので、用件はいつもメールにたまります。それを一日に何度も見れば、たいていの用事は済ませられます。自分勝手で、申し訳ないとは思いますが、携帯電話をオープンにしたらとても自分の時間をもてません。現代の情報化社会で^Aそれがぼくの自分を守る方法なのです。

今では、電車に乗ると、ほとんどの人がスマホを眺めています。昔は本を読んでいたり、隣の人に気を使いながら新聞を広げている人もいたのになあ、と思います。通学や通勤の時間、身動きがとれない状態のとき、人は他人の⁽¹⁾ジヤマにならないようなことをしたいと思います。昔はそれが読書や新聞でした。それがスマホに代わったのは、スマホがメディアにとつて代わったからです。スマホを使えば、ニュースは読めるし、読書もできる。好きな音楽も聴けます。しかも、仲のいい友だとも交信できる。世界とも仲間ともつながつているという感覚が保れます。それが実はスマホが⁽²⁾普及した一番大きな理由なんじゃないかと思います。

でも、本当の意味で人々は世界とつながつているんだろうか。^B今、人々をつなげているのは情報です。情報を取り⁽³⁾ソコねたら、読み間違えたらつながりが切れてしまう。そういう不安に(2)人々はスマホに頼ります。だけど、人々はそうしてつながつてることに安心感や充足感を覚えているんだろうか、と気になります。ぼくが子どもの頃は、よくわからぬけ

ど、社会や人間に對する信頼感がありました。世界は未知のことがたくさんあるけれど、きっと人間にとつて豊かな未来が開けている、という希望にあふれていました。困っている人がいたら親身になつて助けてあげよう、とみんなが思つていたし、何かトラブルがあればきっと誰かが助けてくれる、と信じていました。でも今は何か違う。困っている人を見ても、その人が誰か、困つている理由が何か、わからなければ^Cむやみに手を貸してはいけない、とまで言われるようになりました。^D自己実現が諂われる一方で、自己責任が問われる。自分の夢を叶えるために他人を押しのけなければならないけれど、自分の能力が勝つていることを証明できれば許される。だから、小さい頃から自分の能力に目覚め、それを向上させることができることで競争に^④駆り立てられる。今の子どもたちにとつて、世間は自分を守つてくれるものではなく、絶えず情報を得て自分を高めなければ、冷たく自分を捨てるように見えているのではないでしようか。だから、つながれる人間は家族でも先生でもなく、自分と同じ^⑤キヨウグウのわずかな仲間に限られてしまう。スマホという情報通信機器がかえつて世界を閉じてしまう結果になつていて。

だとすれば、ぼくたち人間にとつてつながりとは何かということを原点に立ち返つて考えてみなければならない、と思うようになりました。^{注一}長らくゴリラの世界で暮らしたことでのぼくには言葉を用いずにつながりをつくる経験があります。そして、人間の子どもの成長にとつて、どんな動物にもない重要なつながりをつくる時期が二つあることもわかつています。それは、人間が生物としての特徴を持ちながら、人間独自の進化の道を歩んだ結果であり、人間のもつ高度な（3）の^⑥源泉です。スマホをはじめとする現代の情報通信機器は、その（3）を高めるために技術開発を重ねてきた成果であるのに、人間の能力を超えてみるとぼくは思っています。それを実は子どもたちは気がついているのではないか。最近、ぼくの大学の学生たちが、「私たち、スマホ・ラマダン^{注二}をやります」と言つてきました。うん、^E必要かもしれない、とぼくも思います。スマホという便利な機器をいつたん置いて、ぼくらは人間のどんな性質を見直すべきなのか。

それは、^F現代の人間だけを眺めてみてもよくわかりません。情報機器をもたない、いや言葉すらもたない動物の世界に立ち入つて、彼らがどういうつながりをつくつてているのかに目を凝らしてみなければ、人間的なつながりも見えてこないのです。

（山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』より。ただし、一部改変してある。）

注一 長らくゴリラの世界で暮らした——筆者は靈長類学・人類学者であり、ゴリラ研究の世界的権威。ゴリラの森に入つてフィールドワークを行つた。

注二 ラマダン——イスラム教において断食を行う月のこと。

問一 傍線①・③・⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線②・④・⑥の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄（　1　）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア たとえば イ しかも ウ すなわち エ だから オ しかし

問四 傍線A「それ」とは何か、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア めったなことでは携帯電話の番号を教えないこと

イ ぼくが携帯電話をもつていないこと

ウ オフィシャルなメールアドレスは伝えてあること

エ メールにたまつた用件を一日に何度も見れば、たいていの用事は済ませられること

オ 携帯電話をオープンにしたらとても自分の時間がもてないこと

問五 傍線B「今、人々をつなげているのは情報です」を単語に区切つたものとして、最も

適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 今、／人々を／つなげて／いる／のは／情報です

イ 今、／人々／を／つなげ／て／いる／のは／情報です

ウ 今、／人々／を／つなげ／て／いる／のは／情報／です

エ 今、／人々／を／つなげ／て／いる／の／は／情報／です

オ 今、／人々／を／つなげ／て／い／る／の／は／情報／です

問六 空欄（　2　）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア そそのかされて イ おとしいれられて ウ 催促されて
エ 追いつめられて オ 駆られて

問七 傍線C 「むやみに」とほぼ同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 苦しまぎれに イ おもむろに ウ みだりに エ しきりに
オ みだらに

問八 傍線D 「自己実現が諱われる一方で、自己責任が問われる」とはどういうことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 自己実現に向かう意欲がよいことだと賞賛される一方で、自分の能力を幼い頃から開発し、必死に競争することに値打ちがあると決定されていること。
イ 自己実現を果たすことが社会的な価値であると言われる一方で、自分の能力が他者よりも優れているということを証明する義務を負っていること。
ウ 社会において成功をおさめることができると自己実現であるが、その反面、小さなときから競争心を十分高める必要があること。

エ 自己実現をすることが声高に求められる反面、他人に勝てるように自己の能力を伸ばし社会的に成功をおさめることが要求されること。

- オ 他人に勝つことこそが自己実現につながるということを意識する一方で、それを証明する能力を兼ね備える必要があること。

問九 空欄(3)二か所には同じ言葉が入る。(3)に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 情報力 イ 社会力 ウ 生物力 エ 成長力 オ 技術力

(次のページに続きます)

問十 傍線E 「必要かもしないな」と筆者が考えたのはなぜか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア スマホを捨てて不便な生活を味わうと、言葉を用いないゴリラの世界を研究しやすくなるから。

- イ スマホを使わない人生にすることによって、人間本来のコミュニケーション能力を高めることができるから。

- ウ スマホをいつたんやめることによって、人間どうしのつながりについてあらためて考えることができるから。

- エ スマホが本当に必要かどうかを見極めることは、進化を遂げた人間だけができる高度な能力だから。

- オ スマホのない生活を味わうことで、子どもたちが何に気づいているからスマホを捨てたがっているのかがわかるから。

問十一 傍線F 「現代の人間だけ眺めてみてもよくわかりません」とあるが、現代の人間だけ眺めてみても何がよくわからないのか、文章中から十四字の語句を探し、記入しなさい。

問十二 この文章の構成として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 前半で現代社会の抱える課題の一つについて述べ、後半ではその課題をおよそ解決している。

- イ 前半で現状についての疑問をいくつか述べ、後半ではその疑問を一つずつ解決している。

- ウ 前半で現代社会の良さについて述べ、後半では気になることや考え方直したいことを述べている。

- エ 前半で人間社会の抱える問題について述べ、後半では動物社会の良さについて述べている。

- オ 前半で現状やその抱える問題について述べ、後半では解決するための視点のもちかたを述べている。

〔Ⅱ〕次の文章を読んで、問い合わせに答えなさい。なお、字数指定のある問い合わせでは、句読点・記号も字数に数える。

古代インドの賢人たちがこもごも語り合っていたことである。その白熱した議論のなかから飛びだした印象的な言葉がある。

人間はいつたいどのように生き、そしてこの世を去つていつたらいいのか。

それにたいして、かれらは答えていた。

四つの人生段階（ライフステージ）をへて、この世を終えよ。

と答えていた。

四つの人生段階とは、いつたい何か。

学生期
家住期
林住期
遊行期

だ、という。「四住期」である。

何とも目に^①鮮やかな、人間の暮らし方の陣立てだった。最近になつて、この「高齢社会」を論ずる一種のブームのなかで、この「四住期」もよくとりあげられるようになつた。

このような考え方、暮し方の組み立てが、すでに紀元前後のころにはでき上つていたことが私にとつて驚きだつた。アイデア自体は、今から二五〇〇年も前のブッダのころにはかたまつていたらしい。（一）紀元後六～七世紀ころになるとその構想が文字に書写されていたという。わが日本列島は、やつと文明のあかりがともりはじめるころだ。

そんなことを私に気づかせてくれたのが、当時、インドの気鋭の家族社会学者として活躍していたK・M・カパディア教授であり、その著作『インドの婚姻と家族』（オックスフォード大学出版局インド支部、一九五八年）だった。そのことを知つてから翻訳にとりかかり、それか

らほぼ十年後、未来社から出版することができたのだが、そのなかで教授がとりあげていたのが、さきの「四住期」である。

「住期」とはすなわち「ライフステージ」そのものを指し、その明快な表現が新鮮に映ったのが、さきの「四住期」である。

それから、半世紀がたつた。その間、一貫して私の関心を惹きつけたのが、このユニークな骨組みの三番目でてくる

林住期

だつた。

おおまかにいって、この四住期は前半と後半にわかれる。

前半の第一学生期は親と師のいうことをきき、学問と修行にはげみ、禁欲生活を守る。ついで第二の住期である家住期は結婚し、子どもをつくり、家の経済の責任を負う。つまり、この二つのライフステージは世俗的な慣習と秩序にしたがい、世間的なつき合いのなかで暮らしを立てる。

これにたいして後半の第三の林住期は、そのような第一、第二の世俗的なステージから身を離し、それまでやりたいと思いながら実行できなかつたことを、一時的に家をでてやつてみる。ひとりになつて自由な時間を楽しむ。旅と^②ヘンレキ、気ままな遊びの時間、といつていい。それまでの世間的な生活やつき合いから、すこし離れてみる。すると別の世界、思いもしなかつた社会の裏面、その面白さがみえてくる。ヘンレキ詩人のように詩や歌をつくり、うたい、楽器を手に靈場めぐりをする。林に入つて、ひとり静かに^③冥想にふける。過去をふり返り、これからのことを考える。第三林住期の名が登場してきた^B_Aゆえんである。

しかし多くの者は、この第三林住期を楽しんだあとは、もとの村や町に帰つていく。家族のもともどつていく。路銀がつづかなくなることもあるだろう。物乞いのようなことに手をだすこともあるかもしれない。日々の不自由な生活のため、足腰を痛める。疲れはてて、ふるさとへいつのまにか足が向かう。

みる人によつては、何だ、（ 2 ）だけではないか、という人がいるかもしれない。いや、こころの^④センタクをして気分をリフレッシュしたのだと考える人もいるだろう。

けれども、どこか中途半端なところがないではない。自由な時間を楽しんだだけ、気ままに過しただけと思う人もいるだろう。しかし、^Cそれにも飽いた。やはり、もとの生活が恋しい、と。

要するに、一時的な家出である。俗の世界からちよつと抜けだして、異なつた場所に潜入して見聞を広げる、そんな程度のことかもしれない。俗の世界から脱俗の風景にふれてみる、それをのぞき見て、もとの古巣にもどつていく。

マイルドな家出のすすめ、である。これを第三の住期にもつてきたところが、なかなかの思いつきである。（3）なようで、（4）な知恵、といいたくなる。さすが古代インドにおける賢人たちの^D見識には脱帽する。

その上、そのような人生観が何と二〇〇〇年以上の風雪に耐えて伝承されてきたということに、あらためて敬意をあらわきないわけにはいかない。

そしてこの半世紀のあいだ、日本列島にも第三林住期の考え方に関心をもつ人々がすこしづつ増えているらしいのである。それはこれまでのべてきたように、存在の重さから存在の軽さへと、高齢社会の関心がしだいに変化していく姿をそれとなく映しだす徵候のようにも、私の目にはみえる。

そこで、最終段階の第四遊行期はどうか。^E遁世期ともいう。一切の欲望から離脱する現世放棄者のステージだ。この門に入るのは、林住期まで順にたどってきた選ばれた人間だけ。百人に一人、千人に一人、一万人に一人である。

ここまでくれば、もはや世俗の世界にはもどら^Eない。家族のところや村に復帰することはFない。旅から旅、の日常を生きる。

道行く人びと出会い、かれらの^⑤タマシイに呼びかけ、語らい、そして看取る。（5）の仕事といつてもいい。

聖者^Fの道、覚者の旅路だ。インドではさしづめ大昔のブッダ、現代のマハトマ・ガンディーぐらいか。その流れをくむ大小さまざまな苦行者たち、つまり^⑥濃淡いろいろの現世放棄者たち……。

こうして古代インドの老賢者たちが考えた四住期の人生観は、前半の世俗と後半の脱世俗の一につにわかれ。俗と聖に二分割されている。

（山折哲雄『「身軽」の哲学』より。ただし、一部改変してある。）

問一 傍線①・④・⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線②・③・⑥の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 傍線A 「私にとつて驚きだった」ことは何か、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 今から二五〇〇年も前に、現在の「高齢社会」を論ずるブームの到来を見越した「四住期」の考え方がかたまっていたこと。

イ 「四住期」の考え方の最終段階が、第三段階までを順にたどってきた選ばれた人間だけが到達できる聖者の道に通じていること。

ウ 「四住期」のような考え方のアイデアが今から二五〇〇年も前にかたまり、紀元前後のころにはでき上つていたこと。

エ 四つの人生段階を考えただけでなく、第三段階に「林住期」をもつてきたところはなかなかの思いつきであること。

オ 「四住期」のような暮らしの組み立てが、前半の世俗と後半の脱世俗の一いつに見事にわけられていること。

問四 空欄（一）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア そして イ ただし ウ ところが エ だから オ または

問五 傍線B 「ゆえんである」の意味は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 証明である イ 理由である ウ 道理である エ 理屈である
オ 裏付けである

問六 空欄（2）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 水泡に帰した イ 台無しになつた ウ 無に帰した エ ご破算になつた
オ もとの木阿弥になつた

問七 傍線C 「それ」は何を指しているか、「こと」で終わるかたちで文章中の言葉を使つて二十五字以内で記入しなさい。
使つて二十五字内で記入しなさい。

問八 空欄（3）・（4）に入る対義語の組み合わせとして最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | |
|--------|------|--------|------|
| ア 3 偉大 | 4 凡庸 | イ 3 単純 | 4 複雑 |
| エ 3 普通 | 4 奇抜 | オ 3 平凡 | 4 非凡 |

問九 傍線D「見識には脱帽する」とはどういうことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | |
|-----------------|---------------|
| ア 秀でた洞察力に魅力を感じる | イ 高い識見に傾倒する |
| ウ 気位の高さに心底恐れに入る | エ 優れた判断力に感服する |
| オ 自尊心に心から憧れる | |

問十 傍線E・Fの「ない」の品詞の組み合わせとして最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | |
|---------|-------|---------|-------|
| ア E 形容詞 | F 形容詞 | イ E 動詞 | F 形容詞 |
| ウ E 助動詞 | F 助動詞 | エ E 助動詞 | F 形容詞 |
| オ E 形容詞 | F 動詞 | | |

問十一 空欄（5）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ア 離脱 | イ 救済 | ウ 来世 | エ 放棄 | オ 遁世 |
|------|------|------|------|------|

（次のページに続きます）

問十二 この文章の要旨として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 林住期まで順にたどってきた選ばれた人間だけが入れる遊行期は、世俗の世界にもどらない現世放棄者たちのステージである。

イ 古代インドの老賢者たちが考へた四住期の人生觀は、前半と後半で俗と聖に二分割されているところが大変すばらしい。

ウ 四住期の三番目に林住期をもつてきたところが、古代インドの賢人たちのなかの思いつきである。

エ 四住期のような人生觀が二〇〇〇年以上も伝承されてきたインドという国の歴史に、あらためて敬意をあらわさないわけにはいかない。

オ 四住期の第三に林住期をもつてきたことで、第四の遊行期に入ることができる選ばれた人間の偉大さが本当に理解できる。

國語

解答用紙

1

一

問一

1

1

四

四

問十

問
十

1

1

1

1

受驗
番号

国語

解答用紙二

〔II〕

問一

②

〔II〕

〔I〕

やかな

③

④

⑥

⑤

問三

①

〔II〕

〔I〕

問四

問五

問七

問六

問八

問九

問十

問十一

問十二

こと。

